

<追悼文>優しい微笑

池宮, 正治

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

24

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

1995-02-24

優しい微笑

池 宮 正 治

眼前の課題に追われながら慌ただしい時間の奔流に身を置いて、浮き沈みつしている私の耳に、中本さんの突然の入院と、どうやら重篤の病であるらしいという不確かな話が、噂話のように聞こえてきた。3年ほど前のことであろうか。たまに行く上京のさいも入院が埼玉の某病院だと聞くとなかなか見舞う機会もなく、心を傷めていた。

1992年12月10日琉球芸能に関する調査の打合せが文化庁であって上京した。翌日はいつものように国会図書館に行き、のんびりと目的の本などを引き出して調べ物をし、昼下がり館内で島村幸一君とあって、この時その夜中本さんの快気祝いがあることを知った。主催者の都合も聞かず、とにかく中本さんの元気な姿に会いたくて、新宿の会場へ出掛けた。会場の貸切りになった小さな飲み屋には、山梨学院大学に転出したばかりの友人我部政男君や法政大学の比嘉実君らがすでに来ていて、クリス・ドレイク氏らと英訳おもしろを雑誌『言語』に連載して、その100回記念もかねているとのことで、ドレイク氏も大修館の編集者たちも集まってきた。賑やかだ。まもなく中本さんが奥さんに助けられながら現れた。長い闘病生活ですすがに昔日の面影はなく、当然のことながら脚力も弱っているようだった。しかし穏やかで快活ないつもの中本さんの表情は少しも変わっていない。奥さんも長い看病の疲れがあり、今思えばおそらく中本さんの余命を知っておられたはずで、そうした疲労や失意の表情はまったく伺えなかった。ただ単純に我々は中本さんの退院を喜び、乾杯を繰り返し、大いに食べ、談笑し、議論して過ごし、やがて夫婦は少し早めにタクシーを呼んで帰られた。この時に横田さんが写した写真を見ても、だれもがくったくない表情をしている。この時、中本さんが1年2か月後に不帰の客となると誰が想像したであろうか。

私にとって中本さんは同志的な先輩だと、これまでずうっと思ってきた。今から30数年前の61年の春、私が早稲田大学第一文学部国文専攻の2年生のころ、沖縄文化協会のおもしろ研究会が新たに持たれることになった。仲原善忠先生と比嘉春潮先生がハワイ大学の招聘教授として行かれていた年で、リポーターの講師は外間守善先生だった。会場も見里朝慶先生のお宅や外間先生のお宅をを転々としていたように思う。この時のメンバーにヨーゼフ・クライナーや、後に新崎盛暉氏の奥方になる、小生にとっては一期先輩の吉田恵子さんらの顔があった。1年するとハワイから仲原先生が戻り、そのころには会場も、金城芳子先生の勤務先でもあった新宿の都立中央児童相談所になっていた。この頃国学院大学の桜井満さん、国語研究所にいた若き上村幸雄さんらが顔を出していたのを覚えている。この頃であろう、都

立大学大学院に籍をおいた中本さんと比嘉政夫さんが常連で見えていた。当時沖縄研究をする若者は皆無とってよかった。研究会もややもするとご老人の懐古談の場になっていた。我部君や比屋根照夫君らが進学すべく上京してくるまで、私より若い若者はついに1人も入って来なかったのである。それほど沖縄研究の未来は暗澹たるものだった。同志的先輩といたのはこの数年の暗くつらい時期を共有した連帯感を私としては指している。

中本さんは平山輝男先生の研究室に入り、先生を助けて精力的に調査研究と執筆に没頭することになる。しかしそれは、私学出身の、しかも特に自由な雰囲気のある私のいる大学からみると、まるで死語になった滅私奉公をしているようにも思えた。67年に出た大著『琉球先島方言の総合的研究』のまとめにはっていたころ、ついに首の筋肉が硬直して首が回らなくなったことがあった。金がなくて首が回らないのでないか、と冷やかしたものである。彼の頑張りやかくの如しである。

双方が国文出身である比嘉政夫さんと大山成子さんが結婚したとき、蔵書の中から余分な図書として『万葉集大成』（総索引）や『古事記大成』が放出された。中本さんは『万葉集大成』を欲しがったが、当時私は大学院で万葉集を専攻していたので私のものになった。中本さんは苦情をいうこともなく、例によってあの優しい微笑で許してくれたが、悪いことをしたものだと思っている。

67年の沖縄タイムスの正月号だったか、外間守善先生が司会で、沖縄研究をする若者ということで中本・比嘉・我部それに私の四人の座談会が掲載されたが、この中でもっとも体力を誇ったのが中本さん、私よりも虚弱だった。その中本さんが先立つなんて、いまだに信じられない。興が乗ると、若いころ奥武島で、素潜りのタタチャー・追い込み漁をしたことなどを楽しそうに話していたあの強健な中本さんである。あのウミンチュの精悍なマスクと物腰柔らかい話振り、いつまでも忘れられない。

近年の中本さんは、膨大な琉球方言の調査研究を土台にして、日本語の祖語、祖祖語について積極的に発言し、琉球の根幹に関わる文化や言語についても精力的に執筆していた。さらには壮大な世界言語規模の構想も示すなど、その活動が注目されつつある中での訃報である。当人も残念だったであろうが、我々にとっても悔やみきれないものがある。いま残された者は、中本さんの遺志を引き継いで発展させる責務を負っているのだ、と思う。

安らかに。合掌。

(琉球大学教授)